

当科における副鼻腔真菌症症例の検討

太田 伸男 稲村 博雄 小池 修治
櫻井 真一 青柳 優

山形大学耳鼻咽喉・頭頸部外科

はじめに

副鼻腔真菌症は比較的稀な疾患とされてきたが、近年その報告は増加している。今回われわれは、当科にて経験した副鼻腔真菌症症例について臨床的に検討したのでその結果について報告する。

対 象

1994年から2006年12月まで当科にて手術を行い、病理学的に副鼻腔真菌症と診断された22症例を対象とした。

結 果

年齢は23から85歳、平均年齢は58.4歳、男女比は男性9例、女性13例であった。

主訴は鼻閉が11例と最も多く、後鼻漏5例、頬部痛4例、頭重感3例であった。また、自覚症状は無いものの、他の疾患によるCTやMRIによって偶然発見された無症候性上顎洞真菌症例は2例であった。基礎疾患として糖尿病3例で

あった。全例とも一側性病変で左右差はなく、罹患洞は上顎洞が19例で最も多く、上顎洞から篩骨洞に及ぶものが2例、篩骨洞から蝶骨洞に及ぶものが1例であった。手術は、上顎洞単独例および篩骨洞まで及ぶもの場合は根本術を行ってきたが、内視鏡手術が導入されてからは内視鏡的開放術を行っている。菌種は11例がアスペルギルス、カンジダ3例、ムコール1例であった。全例で治療経過は良好であり、再発は認めていない。

考 察

副鼻腔真菌症の報告数が増えている理由は、高齢化に伴う基礎疾患の増加とともに、抗生剤の多用による菌交代現象などが指摘されている。脳ドックなどにより偶然発見される場合もあり、かならずしも基礎疾患があるとは限らない。副鼻腔真菌症の画像診断において、CTにて軟部陰影中の石灰化や骨破壊が認められ、しばしば悪性腫瘍との鑑別が必要となる。